
変なシンデレラ

晴(ヒトミ)

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

変なシンデレラ

【コード】

N4193Q

【作者名】

晴ハルヒ

【あらすじ】

—— あれ、どこだココ？

あ、そうか。

ここはパロディの国だ。

男にしか見えねえオレが主役の、変なシンデレラ。

ん？ でもなんかオカシイ。

シンデレラに『謎の男』なんて出て来てたっけ？

いやいや、その前に、何で王子がスーツを着た黒い悪魔なんだよ？

……あ、そうか。『ゴク怖！』だからか。

そついやコレって、『ゴク怖！』のパロディだもんな。

ココで、『ゴク怖！』を知らねえ人にちよつと登場人物紹介。

藤堂ルイ：オレだ！ 見た目も中身も男だけど実はオンナ。『ルイ、アンタ女のコなのよ』って子供の頃母ちゃんに言われてオレって女なんだって自覚。 ちよつと変わったニューヒロイン。

相模龍：相模組6代目若頭、加えて、京王高校の支配権を持つ最凶男。

コイツをぶん殴った事がきっかけでオレは今本編で大変な事になつてる。

矢田リヨウ：相模の唯一の理解者であり相模大好き男であり…。
最初はめちゃくちや変な嫉妬でコイツのお陰で散々な目に遭ったんだぜ！ 今じゃあ何故か凄え気にいられてて、相模とオレを独占しようとしてくる奴。

ゲンじい…このオッサンはイマイチオレも不明なんだけど、どうも相模の行く所、必ずと言っていい程ゲンじいが居るんだ。
何故か変に勘の鋭いオッサンだ！！

……ま、こんなトコか。

因みにこの作品は、別サイトで運営中のHP4万HIT記念メルマガを掲載してるぞ！

とにかく、これは『ゴクドーなんて怖くない！』のキャストで贈る、作者完全悪ノリのシンデレラのパロディだ！！！！

先に謝っておこう！

期待ハズレでゴメンナサイm(´ー`)m

変なシンデレラ1

昔々、あるところに

継父と、その娘二人とシンデレラがいました。

「よお、お嬢…じゃなかった。シンデレラよお、飯はどうした、飯は」

継父はシンデレラだけにはイジワルで…

「ああ！？ ゲンじい、まだあんな卵焼きが食いてえってのか！？
いいぜ、作ってやるうか！！」

イジワルで…

「あ、アホンダラ！ 今はゲンじいじゃねえだろが！」

「うっせー！ バーカ！」

イジワルでしたが……、

シンデレラはそれを脆ともしない強い子でした。

そしてまたあるところに

極悪非道と呼ばれる王子がいました。

「ああクソ…！ ルイは、ルイはどこだよ！？」

王子は何故か出会う前からシンデレラを知っていて…、

「タツ駄目じゃん！ 藤堂とは舞踏会で知り合っただからよ」

偉く美形な謎の男に怒られていました。

「ああ！？ 何でリヨウがココに居んだよ！？」

王子はいつか会う姫を想って眠りにつきました。

「ホラ、タツ眠って？」

ガバツ！！

「はあ！？ リョウ…！ お前、何してんだよ！？」

謎の男はそんな王子を――

「俺、藤堂に会うまでタツと一緒に眠りたい！」

夢中で襲っています。

「バカか！ 早く配役に戻れ！」

「フフ…。俺、こういう役だもん！」

「ふざけんなよ、コラ…！」

ドタバタ…

「タツ煙草臭い。こんなんじゃあ藤堂に嫌われるよ…。」

「な、何だと!？」

「隙あり!」

ガバツ!!

謎の男はここぞとばかりに王子に襲い掛かった!

「おい!? バカ! マジで何してんだよ!」

王子の唇はペロリと謎の美少年に食べられてしまいました。

「ん〜、タツの口の中、煙草の味する…!」

王子と謎の男が暴れてる、丁度その頃、

シンデレラは姉達からイジワルを受けていました。

「ルイくんゴメンね〜! ホラ、さっさとお掃除やっちゃって〜!」

「駄目だよ、サナ、ルイくんは酷い事出来ないよっ…!」

「サナ、いいよ別に。オレ言われなくてもするし」

「ホラ、お洋服も選択しちゃって〜！」

バサバサツ…！

「うげっ！？」

「レイナ酷い！ ルイくんこき使っちゃ駄目！！」

姉達のイジワルにもめげず、
シンデレラはひたむきにお掃除、洗濯を頑張ります。

「おりゃー！！」

「あ！ ルイくんそれ洗濯機のフタ開いてるよ〜！！」

ゴウワン　ゴウワン　ゴウワン…！！

「うわっ！？　何か吹き出して来た！？」

「ルイくん洗剤入れすぎ!」

ブクブクブクブクブクブク…

「うわわわわわわわわ!」

シンデレラは

それはもうひたむきに頑張ります。

「ルイくん 掃除機が勝手に回ってる!」

ガファンガファンガファン…

「ひひひひひひひ!」

「ルイくん掃除機からゴミが飛び出してる!」

「もうお嬢は舞踏会に出させねえぜ」

舞踏会というと、町中の娘達が王子のお嫁さんになるのを狙って、毎年楽しみにしている行事です。

「あつそ。アンタそんな事して、相模に何されるか 覚悟出来てんだろうな!？」

「お嬢! そ、そりゃねえぜ!」

「そうよ、そうよ! ルイくんだけ仲間はずれにして、ゲンクソジジイのバカナスビ」

「うるっせえ! サナは黙ってるい!」

さてさて、王子はというと...

京王と組と謎の男の板挟みで疲れて眠っていました。

・
・

変なシンデレラ2

いつもの黒いスーツを纏って

相模城の中で？

王子は無防備に眠っていました。

ギシ…

そこに近付く黒い影ーー！。

「タツみーっけ」

「……………」

王子が大好きな謎の男は…

横たわるベットに這い上がりーー

王子のベットの中に……

モゾモゾ…

「……待て。 おかしい。 やっぱおかしいだろ、このシナリオ、
何だ!？」

「駄目だよ、シナリオ無視しちゃあ。 ホラ、横になって？」

ドサツ!

「バカ! お前、調子に乗んなよ!」

「タツがいけないんだよ。 本編で俺から何もかも奪い取るから……」

「ああ!？」

「俺だつて藤堂の事、好きなのに……グスッ」

「仕方ねーだろ。 俺はルイが欲しいんだよ」

「だから、俺も同じじゃん？」

「ああ？」

「藤堂を奪つといて、俺を突き放す気？」

「……………」

「俺だって、怒る事あるんだよ？」

「だからってどうしろっつうんだよ」

「ココでは俺の好きにさせて！」

リヨウと呼ばれる謎の男は、若…イヤイヤ、王子の体に覆いかぶさ
つて

無理矢理唇を塞いだ。

「…っいい加減にしろよ！ ?せめて俺に攻めさせる…!! ?俺を
襲うんじゃねえ！」

そういう問題ですか

ソワソワ…

「ん？ お嬢どうした？」

「イヤ…、何となく嫌な寒気がしただけ」

「もうスタンバイだぜ？」

「おう…」

(何だろう、何か嫌な胸騒ぎがする。こっ…、めっちゃくちゃ嫌な予感が…)

コンコン…

シンデレラの胸騒ぎが引き寄せるかの様に、

家のドアを叩く音が響きます。

「ちよい失礼！」

何となく嫌な感じの物言いの男が入って来ましたー！。

ボスっ！

謎の男を押し倒す王子。

そのころ相模城の中は、
禁断の世界に踏み込む一歩手前の状態。

ちよつとした修羅場モード。

「上等じゃねえか。 リョウがその気なら…、 やってやるつか!？」

王子の声に

挑発的な視線を流す美少年。

「いいよ。 俺、慣れてるし。 されんの、初めてじゃないし」

「お前…! あの下衆と俺を一緒にすんじゃねえよ!！」

「タツ、熱くなりすぎ。 コレ、お芝居でしょ？」

偉く冷静な目で

ジツと見つめる、犬の様な瞳。

「マジでふざけんな!! お前が突然消えた時、俺がどんな思いで探してたと思うよ!？」

若に戻った男は
美少年の両肩を強くソファに押し付ける。

「ウン。分かってる。でも俺も、タツ達を守るためだったんだよ？ アイツにみんな殺しちゃうよって言われてさ…。だから、我慢したよ？」

「うるせえ！」

「タツ、何にも聞かなかったよね？ アイツ、俺に服を脱げって言うて来た」

「黙れ…！ コレ以上言うんじゃない！」

「動いたら殺すよって。そういつて全身を撫で回されてさ、毎日毎日抱かれたよ。途中から何人が加わって…」

「やめろ…！」

「でも俺、信じてたよ？ タツが助けてくれるって…」

「やめる…」

穏やかな顔で微笑む美少年をギュッと抱き締めた。

あの事件の後から、少年は暫く一人で眠る事を嫌がった。

毎晩の様に部屋に忍び込んで、唯一心を許してる男の側で眠る。

そんな夜が1年は続いた。

夜中、魔^{うな}されてすすり泣く事もあった。

だから、当時自分も少年だったその男は 過去のトラウマに脅かされて眠る少年の体を抱いて、
再び眠りに就くまで何度も頭を撫でてあげた。

「タツ……………」

自分と比べて華奢な体格。

災いの元凶となった、少年のしなやかな体。

ほのかに香る、不思議な香り。

目を伏せていても魅力的な美貌。

確かに、コイツを可愛いとは思う。

だけどそれは、自分の唯一の“家族” に対する情愛の様なもの。

男にとっては、少年も 守るべき対象だから。

震えて泣いていれば、抱き締めて癒してやる。

彼の中では至極当たり前の行為だった。

でも、腕の中で眠る少年は どんどん自分に身を寄せて来る。

今でもたまに

部屋に忍び込んで来る事がある。

『一緒に入る』と風呂場に入って来た事もあった。

『タツ、俺 洗ってあげる』

裸の自分に抱きついて、指を使って体を撫で回す。

その指遣いが、わざと体を反応させてる様で――

『バカ、んな事しなくていい』

直ぐに引き離れた事を思い出した。

．．．

変なシンデレラ3

そして今、自分の腕の中に居る少年は、やはりあの時と変わらない
しなやかな体をしており、

いい匂いを漂わせながらイタズラに自分を挑発してくる。

お前を守り切れ無かったと、

想像も付かない痛みを抱える少年に詫びたあの頃。

変わり果てた姿を見て、立ち直れない位に打ちひしがれた。

男の心にも 深く傷を付けていた。

その古傷を、

事件の被害者である少年自ら蒸し返して来る。

思い出したくも無いはずの あの男の事まで持ち出して。

「お前、俺にどうさせたいんだ」

途方もなく、溜息を吐いた。

「キスして欲しい」

少年は男の気持ちとは間逆に、嬉しそうに微笑みながら答えた。

「お前な……」

「藤堂に会うまで、タツは俺のもの」

今更ながら、あれは本気だったんだと思う。

美少年は舌舐めずりしながら、男の顔を自分に引き寄せた。

男にしては、柔い、果実の様な唇が自分に重ねられる。

チュ……っと音を立てて少し離して、また合わさる。

兄弟の様に思っていた少年からの 熱いキス。

気持ちとは裏腹に、身体が無意識に反応する。

少年はそれを熟知していて、更にキスを濃厚にさせる。

口の中に、しっとり濡れた舌が押し入ってきた。

少年の手が、自分の身体を真探し始めていたー！。

「キス以上は…、してやれねえぞ」

「ウン…」

男の胸板に、ツウ…、と指を這わす。？

ヤバイな…。

今の言葉を何処まで理解してるか分かったもんじゃねえ。？

どうするか…、と考えを巡らせる。

長年を共にすると、何故か相手の弱い部分も分かっってしまう。

美少年は、知ってる。

男の弱点を。

シャツを真探り手を入れ、6つに割れた腹筋に手を這わす。

「く…っ」

男の口から声が漏れた。

「タツ、キスにも色々あるんだよ？」

「おい…」

俺の身体を玩具に使いやがって…。

そう心の中で一人ごちた。

その頃、シンデレラのお家でもちよつとした一混乱が起きていました。

「最つ悪！！ 来んじゃねえ！ クソバカ、んのネコ男！！」

「連れねえネ、オネーチャン。 折角再開出来たんじゃん」

「アホ！！ テメーなんか新キャラなんだからまだ出て来なくていいんだよ！！」

突然お城からの御使いだと名のる男が現れ、その男は 何故かシンデレラの事を執念深く追っていたのです。

「ねえねえ、あの人誰？」

「サナ知らない……」

突然現れたネコ男に追い回されるシンデレラ。

「新キャラつつつたら “ヒョウガ” じゃねえかい？」

「ハ…、アンタまさか噂の “ゲンじい” なワケ？」

シンデレラを追い回す男がピタリと止まった。

シンデレラはデカシタとばかりに暖炉の影に逃げ込んだ。

「百聞は一見にしかず」

「一見にしかず」

暫し見つめあう二人。

「…飛んで火にいる…」

「夏の虫」

何かをブツブツ言い合いながらお互い接近する。

「腐っても…！」

「鯛！」

「窮鼠…！」

「猫を噛む…！」

「きじも鳴かすば…！」

「打たれまい…！」

「え？ 何言っちゃってんの？ あの二人」

「サナ、ちんぷんかんぷん」

二人の距離がズンズン近くなる！

「泣きつ面に…！」

「蜂…！」

ガシツと硬い握手を交わす二人。

その姿はもはや初対面とは思えない。

生き別れた兄弟。

いや、前世での血縁。

ソウルメイト。

ジジ臭いと言われて来た…。

コイツらの教育係に就いて数年。

誰かサンの幼少期と同じく一筋縄ではいかない我がまま嬢たちは、
しまいにゃあ、“ゲンじい”なんて変なあだ名まで付けて来やがっ
た。

『ゲンじいの頭が硬いんだよ〜!』

『ゲクソジジイの どエロ〜』

『もー、お酒臭い〜』

俺が硬いだの、オヤジだの、言いたい放題言われて来た。

日本酒をチビチビ飲めば『ゲンじいだけ渋いんだよ』と文句を言われ、

研修させれば『エロオヤジ〜!』とヤジられる。

男の美学を否定される肩身の狭い女達の中で、ここ数年過ごして来た。

そんな俺と

どうも似た様な臭いを感じる。

・

見た目は全く違っけどよ。 熱く握手を交わし、ゲンじいは思っ。

コイツとは、似た様な臭いをビシバシ感じるぜい!

ソレは、相手の男も同じ様で、二人は無言で熱い握手を暫く交わした。

「...どうでもいいけど、何しに来たんだよアンタ」

「友よ…」

「兄貴！」

本編では消して見れない、二人の男の固き友情――

「所でこの人何しに来たんだろ…」

ヒソヒソ

「さあ。暇人なんだよ」

ヒソヒソ

ネコ男は固い握手を交わした後、

「オネーチャンを迎えに来たのよ」

「ああ？」

暖炉の影に隠れてるシンデレラを見てこう言いました。

「舞踏会に行けないんしょ？　なら俺と遊ばナイ？」

「な、何でお前がその事知ってんだよ！？」

「ハハン。俺　使者だからネ。　職権乱用よ」

ツカツカと歩み寄って来る！

変なシンデレラ4

「ふ、ふざけんな！ 何勝手な事してんだよ!？」

「アハハ。俺なんて元々飛び入りだもん。この際何でもありっしょ」

「ああ!？ 晴、アイツ何考えてんだよ!？」

「趣味趣味!」

逃げ惑うシンデレラにも止まらぬ早さで接近した使者は、とうとうシンデレラを捕まえた!

「ぎゃっ!?!」

腕をグッと掴んで引き寄せ、無理矢理胸元に閉じ込める。

シンデレラの体は一瞬にして、甘いバニラとムスクの香りに包まれた。

上から見下ろす使用者は、ネコ科の様な八重歯を覗かせてニヤついた。

「奪っちゃおっかなー、カラダ」

シンデレラは体の中から寒気を感じた。

「アハハ。俺の物〜！」

「は、離せ…、離しやがれ！」

ズルズルと引き摺られていく。

シンデレラは舞踏会に行く代わりにネコ男と出掛けて行きました。

「ねえ、こんなシナリオだったっけ？」

「分かんない。ん？ ゲンじいは？」

ゲンじいまでも居なくなりました。

もう皆勝手に動いています。

シンデレラは王子と出会えるのでしょうか。

「おい！ 一体何処に向かってんだよ!？」

ズルズルズルズル…

「ん〜、特には考えて無かったりして」

「はー」

ズズズズズズズズ…

「俺とオネーチャンのラブ記念。 何処に行こっかなー」

「ああ!？ ふざけんじゃねえ!! 下ろせバカ!」

ダダダンスズ…トタンテジヨリスズズ…

「オナーチャン何踊ってんのよ」

「ち、ちがあああう！」

「ハイそこまで」

ネコ男の前に

黒いフードを被った：

「矢田！？」

「ん？ 誰よアイツ」

ええそうです。

謎の男が現れました。

さっきまで王子を襲っていた、あの謎の男です。

どっちらやっとならぬと出番が来たようです。

変なシンデレラ5

使者は謎の男を見て顔をしかめた。

「俺、アンタの事好かねえナ」

「は、それは俺のセリフ。早く藤堂返して」

(アイツ、俺よりイケメンじゃん)

使者の心の声

使者の胸に過る、勝手なジエラシー。

変な黒いフードを被って体の殆どを隠してるのにも拘らず、湧き立つ様な魅力と色気がソイツにはある。

「矢田！ 何でもいいから助ける！」

「ホラ、藤堂だって嫌がってるじゃん。離さないと俺怒るよ？」

「……………」

ムカッ

(怒ると余計にいいオトコに見えんじゃん、コイツ！)

怒った美形の顔ほど、迫力のある物は無い。

自分の腕の中で暴れるシンデレラに執着する美形男が憎らしい…。

使者はますますジェラシーを感じた。

「お前！ ちょっと人よりイケメンだからって、調子に乗んなよ！」

吠える使者。

「は？ いいから藤堂返せ！」

更に怒る謎の男。

「俺はこれからオネーチャンと遊ぶんだよ！ 誰がテメーに渡すかよ」

更にガシッとシンデレラを抱き締める。

「ボケ……、見知らぬ奴に触られて胸くそ悪いんだよ！ 離しやがれ！！」

それを見た謎の男が動いた。
かなりキレた顔でメンチ切って使者に近付く。

「藤堂、俺の彼女だから」

「は！？ オレがいつ矢田の彼女に……」

「俺の彼女だもん……」

謎の男が近寄る。

「おい、イケメン野郎！ こっちに来んじゃねえ！」

謎の男は使者の腕の中で暴れるシンデレラをガシッと掴むと

「藤堂、俺の彼女だもん！！」

「ちょ…、矢田！」

顔を両手で包んでチュツとキスをした。

「ああー！！ 俺のオネーチャンに何すんだよ！！」

「うるせえ！ これで分かっただろ、藤堂は俺の将来の奥さんなの！」

「待て…、待て！ 話が、話がどんどんズレてく。 何だよ奥さんて！？ そんな約束した覚えねえ！」

「藤堂はそうなるんだよ」

「な、ならねえよ……」

「おい！ 人のオネーチャン捕まえて良い雰囲気になってんな！」

イケメンのクセに（ヒガみ）俺のオネーチャンまで獲ろうとしやがって……。

使者はシンデレラを連れ去ろうと動いた。

だがしかし、謎の男がそれを阻止する！

謎の男……もういや、リョウはルイの両肩を掴むと、ジッと目を見つめながら問い質す。

「藤堂はどっちがいいの？」

「ーは」

「俺とソイツと、藤堂はどっちと一緒に居たいの？」

「ああ！？ んなの、初対面の俺はめっちゃ不利じゃねーの！」

（無視）

「ねえ、藤堂が選びなよ」

「……………」

ネコ男と矢田。

そんなの、考えるまでも無くー

「矢田がいい」
ポツリ

「オネーチャン、少しは悩んでよ」
グスン

そう言うと、まるで魔法の解けた様に使者の腕をスルリと抜け出すシンデレラ。

いや、というよりも
意外とナイーブな使者は、ちよつとばかり傷付いていた。

その傷付いた隙を突いて、使者の腕を抜け出したシンデレラ。

「俺、これでもう登場終わりじゃん……………」

可哀想なので、作者の独断と偏見で
自己紹介だけでもさせてあげる事にした。

変なシンデレラ 6

という事で、
改めまして……

メルマガ読者の方だけに、新キャラ紹介。

使用者役だったネコ男。

「俺は、豹牙。多分、本編では“ヒョウガ”で出てくるぜ。
まだ存在感が無いけどな……」

グサッ

自分で言っただけで自分で傷つく男。

「好きなものは、ポッキー、ショートケーキ、チョコ、マイメロ、
キティとか。とにかく、甘いモンと可愛いのが凄え好きなワケ」

特徴その?…いつも前髪を上げてる。

「スツキリしてんのが好きなのよ。 シュシュ使ったりヘアピンとか力チューシャとか。 回りの女が色々くれるから、毎日飽きねえヨ」

特徴その？：たまにキャラグッズを身に付けてる。

「一番多いのはマイメロのスリッパ。 あれめっちゃ可愛いヨ。 あ、俺こんな喋りだけど一応ノーマルだから」？

その他：好き嫌いがはっきりしてる。

「え、そんなモンでしょ誰だって。 来るもの拒まずじゃ無いワケよ。 好きになったらトコトン好きだし、嫌いな奴は大体ずっと嫌い」

皆様、これから宜しくお願いします。

「あゝあ。 折角出て来たってのに。 傷ついて終わっちゃったヨ。 皆、んじゃまたって事で…」

ヒョウガ…もとい、使者は帰って行った。

「アイツ、誰に話し掛けてんだ」

「知らない。それより二人っきりだね」

「……………」

「……………」

二人っきり……………。

「何。藤堂何で固まるの」

「お前、ほ本編でも二人っきりで…」

「あ、うん。ゴメンね？」

サラッ

「お、お前！ 簡単に流すなよ！ オレがどれだけ嫌な思いしたと思っただよ！？」

「仕方ないじゃん、本能なんだし。それに全部藤堂が悪い」

「な、何言っただよ！」

「ホラ、つべこべ言わずに着替えるよ？」

「ああ!？」

「舞踏会。 行くんでしょ？ だったら着替えなきゃ。
はい服脱いで」

・
・

「は…」

「脱がないと着替えられないじゃん。 ホラ脱いで」

謎の男は何処か楽しそうに近寄って来る！

シンデレラは本編と同じく、只ならぬ危機感を感じた！

「い、いいよ…、向こうに行って着替えるから…」

「ん、ダメ。 ココで脱ぐの」

「な、何で…」

「決まってるじゃん。藤堂のハダカが見たいから。ついでにあわよくばエッチに繋げて…」

「は！？ い、嫌だ！！ もう お前となんて…」

「何言ってるの。これから嫌って言うほどエッチするでしょ、俺達」

謎の男は、

怪しく笑って舌舐めずりした。

発情のサインだった。

「それに、アイツより俺を選んだのは藤堂だよ」

「あ、あれは…」

「いいじゃん、藤堂のちっちゃいオッパイ見たい！」

グサッ

シンデレラは結構ショックだった。

小さいとは自分でも分かってたけど。

だから、サラシでも充分なんだけど。

でも、やっぱり矢田もオレの胸が小さいって思ってたんだ…。

「お前ふざげんなよ」

その時、

とても聞き覚えのある、

今は懐かしい声が聴こえた。

変なシンデレラ 7

*ココからは、より感情移入しやすい様に、暫くルイ目線でご覧下さいm(´`´)m

何か、めちゃくちゃ懐かしい

凄く聞き覚えのある声が聞こえた。

オレの背中から聞こえる声に
僅かに胸がドキドキし始めて、少し胸がキュウっと締め付けられる
気分になった。

50

「ルイは俺のオンナだ！」

「……………」

懐かしい、強引に独占しようとする男の声……。。

「相模……」

ジワツと胸に熱くこみ上げる物を必死に堪えて振り返った。

.

そこには――

「さが……」

馬――

の格好をした梅を踏み付け佇む、

懐かしの悪魔……。

「よお、浮気娘……」

が、首に巻き付けた梅の手綱を引いて不機嫌そうにガシガシ踏み付けながらオレを見た。

「その言い方辞めろよ……」

懐かしいのに。

本編でも会えなくて、本当は凄く嬉しいのに。

「お前、余所見してんじゃねえよ！」

相模は久々の再開を堪能するどころか、凄え怒った顔でオレを見据えた。

「タツ、約束が違うじゃん」

矢田がジロリと相模を睨んだ。

相模は梅の手綱を放り捨て、ズカズカとオレの方へ歩み寄って来た。

「約束が違うじゃなかあ！！ タツのバカ！」

「ルイ、来いよ」

「おい、おい！ 相模！？」

「コレ以上俺を待たすんじゃねえ」

強引に腕を掴まれた。

変なシンデレラ 8

「ダメ！ 今藤堂は俺の物！！」

相模に引つ張られるオレのもう片方の腕を矢田がガシツと掴んだ。

「ああ！？ ふざけんな！ ルイから離れる！」

「タツのバカ！！ タツが、俺と藤堂の時間を許すって言うから解放してあげたのに……」

「おい…、痛え。 痛えんだけど……」

片方には相模。

もう片方には矢田。

まるで本編の悪夢再び……みてえだぜ！

「フッ。 俺は業と来た訳じゃねえぜ？」

「は？」

「文句があんならあのバケモンに言えよ。アイツが勝手に連れて来ただけだぜ？」

相模の指差す方向へ

一斉に全員が顔を向けた！

「ムウ…！ こ、ここは舞踏会場では無いのか!?!」

そこには馬の着ぐるみを着て佇む謎の物体。

背丈に着ぐるみが合ってなくて、

足元だけが人間で余計に無気味だった。

「コイツが勝手に俺を導いただけだ」

「…梅。 アンタ、名前も変だけど…」

「うぬ!? お、俺の名前の話はするな!」

「それにリョウ、お前よくもあんな真似しやがったな…!」

オレを挟んで向こう側の矢田に向かって唸る悪魔。

相模は何かを思い出す様に顔を歪め、手の甲で口元を拭った。

「矢田、何かしたんか？」

「ん？ 藤堂に会うまでタツを襲ってた」

「はあ！？」

「お前、俺の首にキスマーク付けやがっただろ！？」

アイツはギロリと矢田を睨んだ。

「き、キスマークだと…！？ な、何てハレンチなっつ…！！？ ぐ
おお…」

梅が興奮して鼻血をダラダラ流した。

「相模龍…！ 貴様、どこまで邪道な奴なんだ！？」

「矢田、お前もお前だよ。暇だからってそんな事…」

「ん、違うモン。 読者サービスだもん」

「何言ってるんだよ……」

そう呟くオレを相模が抱き上げた。

「そろそろだな……」

そう独り言みてえにボソツと何か言つと、何処かに向かつて歩き始めた。

「だから、ダメだつてば！」

「遊び相手なら、ソイツをくれてやる」

アイツは鼻血をダラダラ流す梅を一瞥して言った。

変なシンデレラ 9

「おい、待て！ 貴様、人の確認も無く、くれてやるとは何事だ！？」

例の如く

梅を無視して相模は歩き出した。

「俺、こんなの要らない」

矢田が梅を指差して呟いた。

「こんな怪物嫌だ！ 俺、藤堂とエッチしたい！！ 本編みたいにエッチしたい！！」

「ふざけんな……」

そう呟いた相模の顔は、今まで見たどの表情より恐ろしかった。

「いい加減ルイを返せ」

「は！？ 藤堂はタツの物じゃ無いもん！！」

相模の声とほぼ同時に見慣れた一台の高級車が勢い良く横付けしてきた。

その運転で何となく分かる。

無駄の無い華麗なハンドル捌きで普通よりひと回りデカイ高級車を運転してんのは――

きつとあのオッサンだ。

「とにかくソレをくれてやる。もう盗聴とかするなよ」

オレを抱えたまま

アイツは車の方へ歩き出した。

「タツのバカ!! 嘘つき!! あんなの要らないもん!! 藤堂

欲し……」

アイツがオレを抱えたまま車に乗り込むと、すぐ様ボタン！とドアが閉められ、

矢田の怒りの声はプツリと途絶えて聴こえなくなった。

「……………」

「お嬢、俺あ今度は若の召し使いよ」

車を運転してたのはやっぱりゲンじいで、オレを見て片眼をウインクした。

「やっぱりお嬢にゃあ、若がお似合いよ！」

「……………」

そう言うとゲンじいは「ま、ごゆっくりどうぞ」とか言って器用に後ろ手でカーテンを引いて、運転席を隠した。

「久し振りだな、オイ」

その直後相模はオレの顔を上に向けて、イキナリキスして来た。

「相模……」

アイツに抱えられてるオレは、
相模の膝の上でされるがままになっちまう訳でー！。

久し振りに落とされた唇の感触に、オレも静かに目を閉じた。

いつものアイツの

段々と深くなるキス。

「相模……」

熱い両手が顔を包みこんで、
何度も頬を撫でられた。

「元気か？」

「おう……」

キスの合間に声を交わした。

久し振りに聞くアイツの声は懐かしくて、

やっぱり少し掠れたハスキーボイスで。

当たり前だけど、

相模が居るって思った。

本当は会えなくて寂しくて、

相模の強引なキスも

筋肉質な腕も

頬を撫でる手触りも

またこうやって味わう事が出来て嬉しいんだ。

変なシンデレラ 10

それから相模は、

ギュウつと抱き締めて来た。

久し振りにアイツの胸の中に頬を寄せた。

「本編でも離ればなれだな」

「おう…」

相模の匂いだ。

いつものアイツの匂い。

「辞めるか」

「え？」

オレを抱き締め、何度も頭を撫でながら相模が呟いた。

「茶番は終わりだ。戻ろつぜ、男と女に」

「……どつという意味だよ」

「そついう事だ」

・
そう言つとアイツは
オレの衣装を脱がせ始めた。

ドレスも、

ウィツグも、

履いてた靴とかも……

「ちよつ、待て、相模！」

「待てるかよ……」

その下の下着までも

凄え勢いで脱がせ始めた。

「ばっ、バカ!! お前っ!? 会ってすぐなんて事すんだよ!?!」

「…ああ!? やつと会えたからヤルんだろうが……」

相模の息が荒い!

アイツがめちゃくちや興奮してんのが凄え分かる。

分かる……、ケド!!!

「い、イキナリ過ぎんだろっつが……っ、ああ!?!」

すっぽんぽんで暴れるオレの脚を筋肉質な腕がガシッと掴んだ。

「溜まらん……」

「うげ……」

獣。

獣の目だ。

久々の、獲物を狙う、獣の目！！！！

それは――

これまでの経験の群を抜く程激しくて――

「ハ…っ、ハア…ハア…ッ」

行為が終わった後、

暫く息切れが止まらなかった。

* (作品の性質上、ラブは書いてませんm) | (mその代わり、第二部はかなり過激に行きます！)

「生き返ったぜ……」

死んだ様にうつ伏せるオレをよそに、ソイツは満足そうに呟いた。

「相模のバカ野郎……」

「本編じゃあこんなモンで済まさねえからな。俺の思いをきっちり受け取れ」

「……………」

その時、何処からか矢田の声が聞こえたんだ。

「タツのばかタツのばかタツのばか…」

「……………」

「どっしたよ、急に固まって」

「どっかから矢田の音がする」

「あ？」

その時オレは見た！！

梅に跨り、オレらを追いかけて来る金太郎……（イヤイヤ）、矢田の姿を！！

車 対 梅！！

今、あり得ねえ事が現実怒ってる……………！！

《あんたら、いい加減にしなさいよ……………！！》

「ーは？」

突然地面が地響きを上げて揺れだし、
天から怖くくい声が聴こえた。

《これじゃあシンデレラでも何でも無いでしょう！ 何でタツが車でルイを拐さらってんの！？ リヨウ！ アンタ魔法使いの役でしょーが！ 何野生児みたいな事してんのよ！？》

天の声は、一人ブツブツと怒ってる。

「ー相模、シンデレラってなんだっけ？」

「俺が知るかよ」

「俺、金太郎じゃないよーー！！」

《ハア…。駄目だわ、この子ら、シンデレラする気ゼロだわ。
これじゃあ本編の暴走と変わらないって…》

「さっきからうるせえな、」の声

「何処から聴こえてんだよ」

《……そんなにいう事を訊かないならー》

ズゴゴゴゴ……！！！！

「何だ何だ！？」

「あ？ 地震かよ？」

「ぐ……ぐおお……！！」

「オラオラ、とっとと走りやがれ！」

ゴン……！！

「うわっ……！！」

世界が地響きを上げてグラグラと揺れる中、梅を伝ってオレらの車の上に矢田が飛び乗って来た！

「タツ！ 藤堂を返せ！！」

ソイツは車の上から顔だけ出して、窓を叩き始めた。

《もう、あんたらしい加減にしなさいよ！！！！》

「げえ！」

「何だこりゃあ？」

瞬間、ぐにやりと世界が曲がって、
オレらは奈落の底に落ちて行ったー！。

変なシンデレラ 完結

「うっわわわああ!!」

いつの間にか車も回りの世界も無くなっていて、

オレらはただひらすら真っ暗闇の中、声を上げて落ちて行ったんだ。

「グググ…、と、藤堂捕まえた!」

「コラ! 俺のルイに触るんじゃねえ!」

「お前らなあ…!」

こんな時でさえもコイツらは変な小競り合いを続け、結局揉みくちやになった。

暗闇の底から、

次第に光が見えて来る。

「フッ、この時を待っていたぞ！ 相模龍！ 今こそ倒してくれるわ！！」

揉みくちやの上から梅の音が聴こえて来る。

「卑怯とでも何とでも呼ぶがイイ！ 貴様を倒して、俺は今度こそ秩序と礼儀ある新しい京王を……」

ズダダダダダ……！！

「ぐ、グハア……！！」

相模が散弾銃で梅を撃った……！！

「アンタ、何してんだよ！？」

「フン」

「あつっ、何か眩しくなってきたよ。 んん……、何だろっ。 急に眠たいや俺」

オレにしがみついたまま矢田が寝息を立て始めた。

そっぴゃオレもー

なんか眠い……。

光の方向へ向かいながら、オレも知らねえうちに目を閉じてた。

それは夢の様な

それでいて現実みてえな

不思議な記憶だった。

オレは何故かシンデレラになってて

でも 変なシンデレラで

今居ない筈の相模まで居て

しかも相模に抱かれてー

「うん………?」

モゾモゾー

夢みてえなんだけど、

それにしてもマジでリアリティがあった。

ゆっくり目を覚ますと

「藤堂おはよ」

「うん…」

やっぱりそこは、
いつもの組の中で

目の前には矢田が笑ってオレを見てる。

「俺、不思議な夢見てたよ」

「へえ。奇遇じゃねえか。オレも変な夢見てた」

「藤堂、シンデレラになってたよ」

「マジ？ それ、オレの見た夢とソックリじゃねえか」

目を覚ますと

オレは何故かすっぱんぽんで

矢田は変な黒いフードを頭から被ってた。

無言でお互いの姿を見つめあった。

「まさかね……」

「おう。まさか——」

あれは

夢だ。

そういう事にしよう。

ああ…青空がなんて綺麗なんだ。

オレの心が洗われるぜ。

数日後、

何処かから使い古した散弾銃が出て来たで大騒ぎしてんのをニュースで見た。

ニュース映像の中に、馬の着ぐるみを来た梅が写り込んでいたことは見なかった事にしておこう。

そういえば、相模の行方不明事件が起きてたらしい。

血相変えて探し回るうち、

何処からともなく戻って来たとか。

「……………」

ま、今日もイイ日になりそうですぜ。

ココはヒロイン達の居なくなった世界。

「それにして遅いのう。 タツもお嬢も、何処で道草食つとるんや
ら…」

天の声に忘れられた物たちが若干2名。

「まあ、深く気にせんと楽しく行こうや！」

「そうじゃな」

誰も来ない舞踏会場で

意外に楽しそうなお二人。

「何じゃあ、わしゃあ誰じゃったかの？」

「アンタはジーサンだろ」

「フム、わしゃあジーサンか」

その声は

広い広い会場に

いつまでも響いていましたとさ。

チャンチャン

変なシンデレラ 完結（後書き）

最後まで読んで下さり、本当に有難うございましたm(┐┌)m
こちらはゴク怖オフィシャルサイトでの訪問者数4万人記念メルマ
ガで配信させて頂いたものを掲載しています。

第二部メルマガは相模が記憶喪失になるお話です。1/27よりメ
ルマガ配信STARTしました。
完結しましたら追ってUP致します。

オフィシャルサイトでは訪問者数5万人記念キャラ投票で決まった
ベスト5のキャラ達が、只今HPを運営しております。

気が向いた方、晴のユーザー情報にてサイトを公開させて頂いてお
ります。

お暇な時にでもどうぞ（*^^*）

では、乱文、長文失礼致しましたm(┐┌)m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4193q/>

変なシンデレラ

2011年1月31日00時04分発行